ご挨拶

本日はゴールデンウィークのまっただ中、いろいろご予定もあったと思いますが、みなさま、ようこそお越し下さいました。心より感謝申し上げます。

港ヨコハマの地に「帆船日本丸を愛する男声合唱団」が誕生して31年目となりました。そして、海の歌を歌う市民合唱団として活動を続けて参りました。毎年の定期演奏会や海の日コンサートへの出演を通じて、横浜のシンボルである海の歌を、そして海の恵みを市民の皆さんに知ってもらうことに、若干なりとも貢献できたのではないかと自負しております。

第1回演奏会は横浜美術館レクチャーホールで開催しました。徐々に会場を広いところに移し、第8回定期演奏会（2003年）以降は、ここ神奈川県立音楽堂をホームステージとしてきました。

私たちはシー・シャンティをメインレパートリーとする日本で唯一の合唱団と自負しておりますが、海、川、湖、そしてお酒に関する様々な楽しい歌に加え、ハーモニーを重視した楽曲にも挑戦しております。精一杯歌いますので、お楽しみいただけましたら幸いです。

帆船日本丸を愛する男声合唱団　一同

プログラム

Weather Side

1. Sailing, Sailing !
2. The Golden Vanity
3. Sloop “John B”
4. Rio Grande
5. What Shall We Do with the Drunken Sailor ?
6. Mingulay Boat Song
7. Swansea Town
8. Shenandoah

Lee Side

1. 音戸の舟唄
2. 函館の女
3. 椰子の実
4. 日本丸船歌
5. Cruising Down the River
6. Bengawan Solo
7. The Leaving of Liverpool

シー・シャンティとは

シー(sea)は海、シャンティ(shanty, chanty)は歌。帆船時代に大型の横帆船の甲板上で、水夫が綱を引いたり、キャプスタンや巻揚機を巻いたりする共同作業の際に歌われた労働歌を元にしています。産業革命以降、木造船が鉄造船になり、帆船から蒸気船になるにつれ、水夫の仕事の内容も変わり、歌われる機会が減ってきました。しかしそれと同時に、シーシャンティは、他の民謡と同じように採譜され、編曲され、伴奏が付けられ、プロやアマチュアの合唱団で歌われるようになりました。機械化・AI化が進展した現代にあっても、帆船そしてシーシャンティは、ヨーロッパを中心に世界中で愛され続けています。

シーシャンティは、労働の内容に応じていくつかのタイプに分けられます。「ショート・ホール・シャンティ」、「ハリヤード・シャンティ」、「キャプスタン・シャンティ」などです。この他に「フォクスル・シャンティ」と言って、非番の船乗りたちが彼らの船室でくつろぎのひと時に歌った歌もあります。こちらは、バラード風で、滑稽なもの、恋人のこと、冒険、歴史上の人物などを題材にした歌の多いのが特徴です。

本日の演奏会

指揮　大久保　憲

東京藝術大学声楽科卒業。イタリア留学時、ミラノにおいてオペラ、コンサートに出演。帰国後、二期会、新国立劇場合唱団メンバーとしてオペラ公演に多数出演。当合唱団キャプテン（第４代）。

ピアノ　神谷季世子

国立音楽大学教育音楽学部卒業。ブライダルオルガニスト。都内ホテルラウンジにてピアノ演奏。ジャズピアノを辛島文雄氏に師事。ヤマハポピュラーミュージックスクール講師。ライブハウス等で活躍中。

ギター　鈴木敏幸

尚美高等音楽学院（現、尚美学園大学）修了後、ジャズギターを宮之上貴昭氏に師事。現在、横浜、東京等を中心に幅広く音楽活動をするなか、自己のグループにおいてライブハウス等で活躍中。

ベース　サリー佐藤

ベースプレーヤー。ジョン・ヒックス（ピアノ）、ハンニバル・M・ピーターソン（トランペット）と「We Four」をレコーディング。現在、オールマイティなベースプレイヤーとして、横浜のライブハウスを中心に活躍中。

歴代キャプテン

大町正人（第１回～第14回）　当合唱団創立者･初代キャプテン、元ボニージャックス･リードテナー。
白石卓也（第15回～第19回）　第２代キャプテン、オーケストラ・合唱指揮者。
大森いちえい（第20回～第26回）　第３代キャプテン、新国立劇場で数々のオペラに出演中。

お世話になった先生方

大町ますみ　ソプラノ歌手、当合唱団ヴォイストレーナーを長く務める。
石黒孝子　ピアニスト・音楽講師、当合唱団のシー・シャンティを多数編曲。
篠田昌伸　作曲家・ピアニスト、当合唱団のシー・シャンティを多数編曲。

帆船日本丸を愛する男声合唱団

1994年５月、横浜市文化振興財団により「ワークショップ～男声合唱編」が開催され、 その時の指導者（故大町正人さん）をキャプテン（音楽監督・指揮者）として結成された男声合唱団。船乗りの労働歌をもととする「シー・シャンティ」をメインレパートリーとし、船や海に関する日本の歌も得意としている。

毎年の定期演奏会に加え、海の日のイベント等でも演奏。世界中の大型帆船とシーシャンティ合唱団が集う世界帆船祭りにも２回招待出演（2003年オランダ・デルフザイル市「デルフセイル2003」、2014年７月ノルウェー・ベルゲン市「トールシップ2014」）。国際シーシャンティ協会(ISSA)には、アジアの合唱団で唯一加盟。毎週火曜日および月１回の休日練習で腕を磨いている。

団員募集中です。オーディションはありません。海が好きな方、船が好きな方、歌が好きな方、一度見学にお越し下さい。詳しくは、ホームページをご覧下さい。https://ssnippon.sakura.ne.jp

Weather Side （風上） シー・シャンティ

1. Sailing, Sailing traditional sea shanty、編曲：Roger Wagner

さあ出帆だ、出帆だ。波躍る大海原の彼方へ向けて。

日本丸合唱団定期演奏会のオープニングを飾るにふさわしい曲です。大型のバーク船（注：日本丸は４本マストバーク船です）が、お誂えの追い風に乗って、波躍る大海原の彼方にある自由の国に向かって出航する様子を描いています。今夜の旅立ちの前に、祖国と快活な女性たちのために歌をうたおう、船乗りに乾杯、兵士に乾杯と、胸は高なります。

2. The Golden Vanity traditional sea shanty、編曲：荒谷俊治

ローランド海を持ち場とする「ゴールデン・ヴァニティ」号の物語です。そこで「The Lowland Sea」「The Lowlands Low」と呼ばれることもあります。ゴールデン・ヴァニティ号は、敵のスペイン船に遭遇してしまいましたが、小さなキャビンボーイの活躍で敵の船腹に穴を空け、スペイン船を沈没させます。

私たちの歌詞はここまでですが、その先には悲しい物語が続きます。ご褒美のはずだった金貨も銀貨も美しい花嫁も反故にされ、少年は溺れ死んでしまうのです。

3. Sloop "John B" traditional sea shanty、編曲：篠田昌伸

この歌は、フロリダ沖の島国バハマの首都であるナッソーで歌われたフォークソングを元にしています。一本マストのスループ船「ジョンＢ号」でのハチャメチャなお話を歌っています。上陸したナッソーで飲み明かして大げんか、酔っ払った一等航海士が船長を傷つけた、コックがシリアルを投げ捨てた、ああお仕舞いだ、早く国に返してくれ、と叫びます。

このフォークソングは多くの音楽家に編曲され、ポピュラーミュージックとなっています。なかでも、ビーチボーイズの歌は 1960 年代に大ヒットしました。

4. Rio Grande traditional sea shanty、編曲：小林正明

リオは川、グランデは大きい、ですので、大きな川という名前です。このリオグランデという名前の川でいちばん有名なのはアメリカとメキシコの境目の川です。ですが、この歌は、ブラジルの最南端リオグランデドスル州（大南河州）を歌っています。むかし金が見つかったため、一攫千金の男どもがここを目指したのです。ボストンのまちは俺には似合わない、オレはリオグランデドスルに行くんだ、と歌います。

5. What Shall We Do with the Drunken Sailor ? traditional sea shanty、編曲：小林正明

錨を巻き上げるために、船乗りたちはキャプスタン棒を握り、甲板上で足を踏み鳴らしながらクルクルと回ります。その時歌われるの歌の一つですが、朝っぱらから酔っぱらってしまった船乗りをどう懲らしめたものか、酔いが醒めるまで小さいロングボートに放り込んでおけ、とか、その船底の栓を抜いてヤツを水浸しにしてやれ、あれこれと考えを吐露する他愛無い、しかしユーモアのある歌です。

歌詞の Way Hay Up She Rises のところでは、甲板の上を踏みならしたと言います。

6. Mingulay Boat Song traditional sea shanty、編曲：小林正明・大町正人

古いスコットランドの民謡です。漁を終えた漁師たちが妻たちの待つミンギュレイ島を目指して帰る様子を歌ったものです。ミンギュレイ島はスコットランドの西、ヘブリディーズ諸島の南端にある小さな島で、現在は無人島です。

７．Swansea Town　　traditional sea shanty、編曲：Alice Parker and Robert Shaw

ウェールズ南部の港町、スウォンジーは18世紀初頭から、銅産業を主とする鉱山冶金業の中心地として栄えましたが、歌は銅鉱石の貿易に従事する小さなバーク船の中で歌われました。また第二次世界大戦中は、Red Duster旗を掲げる英国商船団でもよく歌われました。

歌詞の内容は、港町スウォンジーに住む一人の娘とある船乗りのロマンスですが、この娘への愛しい気持ちは「adore：敬愛する、敬慕する」と表現されています。

編曲者であるRobert Shawの率いる合唱団の歌はYouTubeでも有名ですが、私たちもそれに負けない歌声を目指しています。

8. Shenandoah　　traditional sea shanty、編曲：Norman Luboff・小林正明

シェナンドーは、「ミズーリ河の畔」で暮らすインディアンの酋長の名前です。ここを訪れた白人の男が、この酋長の娘と恋に落ちました。男が去るにあたり、何とかして一緒に連れて帰ろうと、盛んに酋長に懇請するのですが、男の願いは叶えられず、失意のうちに去っていくという内容です。

これまで17回も演奏している愛唱歌的な曲ですが、今回は小編成のアンサンブルでお届けします。

Lee Side（風下）　海の歌、ほか

1.　音戸の舟唄　　広島県民謡、編曲：篠田昌伸

安芸の国（広島県）呉市と倉橋島に挟まれた「音戸の瀬戸」は、狭くて潮の流れが速く、岩もあり渦が巻いて難所とされていました。ここを小さな伝馬船を漕いで渡るのは大変だったでしょう。

呉市は、市の無形文化財に指定し、2008年からほぼ毎年「音戸の舟唄」全国大会を開催しています。

私たちの編曲では、ベースパートが一定のリズムで櫓を漕ぎながら、テナーパートが朗々と歌います。

♪　ヤレ船頭可哀や、音戸の瀬戸でよ、一丈五尺の艪がしわるよ
ヤレ泣いてくれるな、出船の時はよ、沖で艪かいの手がしぶるよ
ヤレ浮いた鷗の、夫婦の仲をよ、情け知らずの伝馬船よ
ヤレ安芸の宮島、廻れば七里よ、浦は七浦ヤーレノエ七戎よ　♪

2.　函館の女（ひと）　　作詞：星野哲郎、作曲：島津伸男、編曲：篠田昌伸

1965年にリリースされ、大ヒットした曲。当時は上野から青森まで特急列車でも10時間以上、青函連絡船に乗り換えて函館港まで約4時間。「はーるばる来たぜ」という気分がぴったりです。

この曲こそ、演歌の大御所北島三郎の名曲中の名曲と言えるでしょう。

３．椰子の実　　作詞：島崎藤村、作曲：大中寅二、編曲：篠田昌伸　(初演)

のちに民俗学者となる柳田國男が学生時代に愛知県渥美半島の伊良湖岬で一か月あまりを過ごしました。或る日の早朝、伊良湖岬の恋路ヶ浜で、南の島から黒潮に乗って流れ着いた椰子の実に遭遇しました。帰京

してその感動を親友の島崎藤村に話したところ、心を動かされた藤村は「漂泊の詩人」である自らの憂いを重ね、この詩を書きました。

(1) 名も知らぬ 遠き島より　流れ寄る 椰子の実一つ
故郷の岸を 離れて　汝はそも 波に幾月
(2) 旧の木は 生いや茂れる　枝はなお 影をやなせる
われもまた 渚を枕　孤身の 浮寝の旅ぞ
(3) 実をとりて 胸にあつれば　新なり 流離の憂
海の日の 沈むを見れば　激り落つ 異郷の涙
思いやる 八重の汐々 いずれの日にか 国に帰らん

4. 日本丸船歌　　作詞：長田恒雄、作曲：小宮山繁、編曲：石黒孝子

練習帆船日本丸は、1930 年に建造され、海王丸とともに多くの船員を育てました。第二次大戦後は、輸送船・引揚げ船としても用いられ、1984 年に引退し、横浜港に繋留されています。2018 年には重要文化財に認定されました。

この歌は、練習船帆船日本丸の若き船乗りをたたえる歌で、寄港の際にはよく歓迎演奏が行われます。当合唱団が 2010 年に徳山港で日本丸を迎えたときにも、埠頭に整列し、演奏しました。

5. Cruising Down the River　　作詞・作曲：Eily Beadell・Neil Tollerton、編曲：篠田昌伸

1945 年の全英コンテストで、お二人のご婦人が優勝を勝ち取った作品です。

お天気がよく、そよ風が吹き、上空には小鳥がさえずる日曜日の昼下がり、舟で川を下りながらハネムーン計画を立ててくつろぐカップルの様子を歌っています。

多くの歌手に歌われましたが、ラスモーガンのレコードは、1949 年、アメリカ「ビルボード誌」で 9 週間にわたり第 1 位に輝きました。

6. Bengawan Solo ブンガワン・ソロ　　作詞・作曲：グサン・マルトハルトノ、編曲：石黒孝子

インドネシア・ジャワ島中部の大河「ソロ川」を歌ったもので、「雨季には水が溢れるが、乾季にはほとんど枯渇してしまう。」「川はソロで生まれ、流れて海に至る。」と雄大な川の自然を讃えています。その自然の不思議さとともに、そこで生きる人々の故郷への想いがうたわれています。

曲自体は日本でも以前からよく知られており、1948 年には松田トシが日本語の歌詞で歌いヒットしました。また、美空ひばり、ボニージャックスも別の歌詞で歌っています。

7. The Leaving of Liverpool　　traditional sea shanty、採譜：大町正人、編曲：石黒孝子

リバプールはアイルランド海に面した港町で、後背地にマンチェスター、ランカスター等の織物工業の町があったことから、外国貿易の基地として栄え、北米のクリッパー船等で大いに賑わいました。

「ディビー・クロケット号」という名のヤンキーの帆船に乗って働くことになった一人の船乗りが、カルフォルニアへ船出をしなければならず、その辛い胸のうちを愛しい恋人に打ち明けます。そして君と今度会えるまでには長い長い時間がかかるだろうけど、もし帰ったら君と一緒になろう、と語りかける、そういった内容です。